

～洛西からの一読～

## 今回のテーマは「ハーバード大学」

世界最高峰の学び舎ハーバード大学で、「日本」はどのように評価され、論じられているのか・・・興味が湧いてきた方にお勧めします。ハーバード大学が、注目している「日本」についての講義内容や、学生たちへのアプローチなど詳しく語っている女性研究者の本を紹介します。



### ハーバード白熱日本史教室

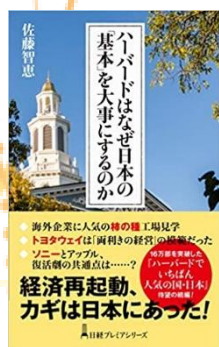
北川智子 著 新潮社

カナダの州立大学UBCで数学と生命科学(ライフサイエンス)を学んでいた筆者は、卒業後の進路を考えていた時期に、日本史を専門とする教授のアシスタンスアルバイトをする。それがきっかけで同大学院の、日本史を専攻することになる。日本史の資料を読む中で、漠然とした違和感をもった筆者は、大学院を前にハーバード大学のサマースクールで日本史概論を学ぶ。博士課程はプリンストン大学で学び、博士論文にめどがついた時期に、ハーバード大学で教員の募集があり応募、採用の通知を受ける。

ハーバード大学の東アジア学部という小さな学部で日本史の講座を担当する。元々、履修者の少ない講座で1年目は16人の履修者であったが、2年目は100人を超える履修者になった。日本史の講座は「Lady Samurai」「KYOTO」という。履修者が劇的に増えた講座の魅力は何か。ハーバード大学では「キュー」と呼ばれる教員評価制度がある。学生による教員評価・講座評価でも高い評価を得た筆者の講座内容や授業の工夫は、一読したい内容である。

### ハーバードはなぜ日本の「基本」を大事にするのか

佐藤智恵 著 日本経済新聞出版



ハーバード大学経営大学院で、日本の多くの企業のことを教材として取り上げていることをご存じですか。約900人の1年生全員が履修する科目ではJR東日本テクノハート TESSEI(テッセイ)、トヨタ自動車、楽天、良品計画、ディー・エヌ・エーの事例が取り上げられている。選択科目では、ホンダエアクラフトカンパニー、AKB48、ディスコなどの事例も教えられているし、エグゼクティブ講座では、ソニー、リクルート、亀田製菓などが取り上げられている。

現在の優良企業を紹介しているというのではなく、そこに至る過程に企業の独自のスピリットがあることが学びの対象になっている。1980年代から「環境」「安全性」「ICT データの蓄積」を続ける機械メーカー、直接、お客様の現場に入り、建設的な対話を通じて現場の「将来あるべき姿」や「真の課題」を見定めていく企業。会社の組織改革のため「新しい組織構造の構築」が重要になるといわれている中で「独自の組織の構築」を個人会計システムを進める企業。日本の企業は、企業内イノベーションを進めながら、新しい時代を切り開いて行っている。日本の企業、日本人の挑戦にまだまだ多くの可能性を感じさせてくれる一冊である。